寺社縁起における女神と天女

田中亜美（早稲田大学）

発表者はこれまで、神奈川県江の島の弁才天信仰を語る、江島縁起諸本の本文表現や典拠を主な対象として、研究を行ってきた。また、光宗『溪嵐拾葉集』に挙げられた六所弁才天をはじめとする、江の島以外の弁才天霊場に関しても、縁起の比較分析を行っている。これらの縁起の中で、弁才天は「弁才天女」ないし「天女」と呼ばれることが多い。もとをたどれば、弁才天信仰が依拠する主な経典である『金光明最勝王経』においても、弁才天は「(大) 弁才天女」、あるいは単に「天女」と呼ばれている。そもそも仏典における天女は、天部に属する女性全般を指すものであり、女神として信仰される特定の天部と、それ以外の女性の天人とを包含する。一方で中国でも、天上や山海の神仙界に仙人・仙女が住むとされ、仏教の天人・天女はこれと結びついた。日本における天女は、仏典および漢籍と共に伝来したこれらの概念と、さらに日本の土着的な伝承とが混淆したものといえる。

日本の寺社縁起における「天女」の語は、天部信仰の対象となる特定の女神、すなわち弁才天・吉祥天・ダキニ天などの女天について用いられる場合と、それに該当せず、仏・菩薩・神を供養したり讃嘆したりする女性の天人を指す場合とがある。さらに、天照大神や白山神といった神々に対しても、天女の語が用いられることがある。

本発表では、主に中世日本の寺社縁起を対象として、「天女」の概念と、女神および天女が与えられている役割について論じる。

先述したように、「天女」には天部の女神と女性の天人一般とが含まれるが、それらは寺社縁起において描き分けられているのだろうか。文章や絵画の表現においてはどのような差別化がされ、そこにはどのような意識と信仰が現れているかを見ていく。また、女神・天女と男神・天男とで、寺社縁起における表現のされかたは同等の位置にあるといえるだろうか。「天女」「天男」および「天」「天人」「天子」等の言葉に着目して、比較検討してみたい。

さらに、寺社縁起における女神・天女の身体性を考えたい。女神・天女は女性の理想像として描かれ、信仰の対象であると同時に、性的対象ともされる存在である。寺社縁起においては、女神・天女のこうした性質と、人々の女神・天女への憧憬と期待がどのように現れているのか、文章や絵画などの様々な表現から総合的に読み取ってみたい。

本発表ではこうした観点から寺社縁起を分析することで、中世日本における、仏神への信仰および文学的営為の中に表れるジェンダー観の一端を明らかにしたい。

キーワード：寺社縁起・女神・天女